

アイヌ語否定表現の語用論的研究 —口承文芸テキストを中心に—

ヌルミ ユッシ (北海道大学大学院)

日本北方言語学会 第7回大会

2024年9月22日

* 本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2119の支援を受けたものです。

はじめに

- アイヌの散文説話 (*uwepeker*) における否定表現はどういったの談話・語用論的機能を持っているのか
- 否定の語用論、談話分析、物語分析の分析道具
- 北海道沙流方言の資料 (21話の物語)
 - 国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ、『アイヌ語音声資料』(田村)、『アイヌ語口承文芸コーパス—音声・グロス付き—』(中川、ブガエワ、小林、吉川)
 - 659件の否定として捉えた発話
- 対話部分vs.語り部分、冒頭部分vs.最終部分
 - 登場人物のセリフと主人公の語りにおける否定表現が持つ談話機能が異なっているのでは？

否定の語用論について

- 非出来事 (*non-event*) と出来事 (*event*)
 - 典型的に、否定が表す非出来事が変化のない背景 (*background*) にあり、肯定が表す出来事 (*event*) が変化を示すので前景 (*foreground*) に上げられる (Givón 2018)
- 否定は前景に関わる重要な情報を提供することもある (Horn 1989; 山田 2010)
 - 図形 (*figure*; 変化、新情報 = 前景) と素地 (*ground*; 不変、旧情報 = 背景) の反転 (Givón 1993; 太田 1980) → 通常の流れにおける変化 (例: 学校に行かなかった)
- 否定の非対称性 (*asymmetrical view of negation*) (Horn 1989)
 - 否定に対応する肯定が「前提」として必要 → 否定は語用論的に有標 (山田 2023:192)
- 否定は評価的 (Labov 1972)
 - 何かが起こるであろうという期待が破られることを表す

否定の扱い方

- アイヌ語の中で一般に否定とされる要素が含まれる構造
 - 文否定 (*sentential negation*)
 - 標準的否定 : *somo VP; VP (ka) somo ki*
 - 否定的な命令 : *iteki VP; ikia(n) VP* など
 - 『否定動詞』 (内部的に否定の意味)
 - *isam* (非存在), *sak* (非所持), *erampewtek* (未知; 知らない, 分らない), *eramiskari* (未知; 知らない, ~ことがない), *eaykap* (不可能; できない)
 - 名詞抱合 : *po-sak* (child-possess.NEG 「子どもを持たない」)
- 埋め込まれている否定
 - eatu somo ki kur*
 - vomit NEG do person 「~を吐かない人」
- 疑問文
 - wenkamuy kononnoitak somo ki ya*
 - bad.god pray.for NEG do Q 「悪神に祈ったりしていないか」

談話的機能

- 否認 (*denial*)
 - 明示的 (*explicit*) vs. 非明示的 (*implicit*) (ヌルミ 2023では「暗示的」)
前述されている命題かそうでない命題 (前提) の否認
 - 否認 = 間違っている情報 (偽) を正そうとする (Mumford 2022)
- 対比 (*contrast*) 「Aでなく、Bだ」 「Bだ。Aではない」 (Nurmi 2024)
- 評価 (*evaluation*) (物語の重要な部分)
 - 部分評価 (*local*) vs. 全体評価 (*global*) (Yamada 2003)
→ 物語の詳細の描写 vs. ストーリーを展開させる役割
- ストーリー展開に関する機能 (*storyline functions*; Yamada 2003)
 - 「問題」 「非問題」 「要求」 「モラル的コメント」 など (ヌルミ 2024)
- 否認以外の発話
 - 命令 (*command*)、断定 (*assertion* (「真」を伝える (Mumford 2022)))、
疑問 (*question*)、条件文 (*conditional clauses*)

対話部分vs.語り部分

- 対話部分（登場人物の会話） — 319件（48,41%）

	明	非明	断	命	疑	条	部	全	問	非問	中立	モラル	要
数	13	194	49	40	17	6	80	239	114	71	73	52	←?9
%	4,08	60,81	15,36	12,54	5,33	1,88	25,08	74,92	35,74	22,26	22,88	16,30	2,82

- 登場人物の会話なのに「明示的な否認」が少ない（7件は一つの物語に）
- 「全体評価」が多く、「モラル的コメント」も割と多い

- 語り部分（語り手（主人公）が語る内容） — 340件（51,59%）

	明	非明	断	命	疑	条	部	全	問	非問	中立	モラル	要
数	5*	238	77	11	4	5	174	166	85	92	151	12	0
%	1,47	70,00	22,65	3,23	1,18	1,47	51,18	48,82	25,00	27,06	44,41	3,53	0,00

- 「部分評価」と「中立的使用」が多い; 詳細の描写が多い
- 「非明示的否認」が多いが、「断定」も対話部分より多い
 - 断定：一回否認された内容の繰り返しや肯定の「ので」文の後に来る否定

*2つは日本語の「でない」（話者の言い間違いを表示→物語に対して外部的）

対話部分における明示的な否認の例

"*a-kor katkemat hunak un e-arpa kusu e-ek ruwe an?*"
4.A-possess lady where to 2.SG-go for 2.SG-come INFR.EVID exist.SG
*sekor hawean. hi kusu, "neun ka arpa-an ka **somo** ki*
QUOT speak NMLZ reason somewhere even go-4.S even NEG do
te ta an-an kusu ek-an ruwe ne" *sekor hawean-an*
here LOC exist.SG-4.S for come-4.S INFR.EVID COP QUOT speak-4.S

「（彼が）『奥様、どこへいらっしゃるおつもりで、おいでになったのですか』と言いました。それで、『どこへも行きません。ここで暮らすために来たのです。』と私が言いました。」

（田村 1985: 36）

- 「どこへ行く」という質問の背景に「どこか行くだろう」という想定がある
- 肯定的な疑問文を通して会話に導入された命題「どこ（か）へ行く」
- 「どこか行く」という命題が明示的に否認される

対話部分における全体評価の例

kuari-an kusu ekimne-an kor ene hawean hi.

set.a.bow.trap-4.S in.order.to go.huntings-4.S PROG like.this speak NMLZ

”*ikian ikian cuppok wa kus pet or un e-ekimne na,*

PROH PROH west from pass.through river place to 2.SG-go.hunting SFP

somo cuppok wa kus pet or un ekimne-an pe ne na.”

NEG west from pass.through river place to go.hunting-4.S NMLZ COP SFP

「私は仕掛け弓をかけるために私が山へ行こうとしている時に [母が] このように言ったのです。『絶対に西を流れる川へ狩りに行ってはいけないぞ、西を流れる川へ狩りに行くものではないぞ。』」

(国立アイヌ民族博物館：N004P.212-215)

- 主人公の母のセリフ。「命令」「全体評価」「モラル」
- 「西を流れる川へ行く」という行為を禁止する⇒話し手（登場人物）のモラル的なスタンス
- 聞き手の注意・興味を引く受け手指向 (*recipient design*; Yamada 2003)
 - 「なぜ『西を流れる川』へ行っては駄目なのか」と考えさせる効果も

”*e-onaha na e-pastetterke hine ekimne p ora*
 2.SG-father still 2.SG-totter CON go.hunting but then
cuppok wa kus pet or un ekimne p konto iwak isam ruwe ne wa
 west from pass.through river place to go.hunting but then return exist.NEG INFR.EVID COP CON
sorekusu cis patek a-ki kor oka-an ora ney ta ka kewpoka ka a-pa ka somo ki
 thus cry only 4.A-do PROG exist.PL-4.S then where LOC even corpse also 4.A-find even NEG do
 (...) *ikian ikian cuppok wa kus pet or un e-ekimne na.*”

PROH PROH west from pass.through river place to 2.SG-go.hunting SFP
sekor patek a-unuhu i-ye
 QUOT only 4.A-mother 4.O-say

「『お前の父親はお前がよちよち歩きの頃山猟に行ったのだが、西を流れる川へ猟に行ったのだが、それから帰ってこないのだ (lit.帰る [ことが] ない)。それこそ私はずっと泣いてばかりいたのだが、そしてどこかから遺体が見つかるということさえもなかったんだよ。 / (だから) 絶対に西を流れる川へお前は猟にいったりはならないよ。』 / このことだけを母は私に言 [った。] 」 (国立アイヌ民族博物館：N004P.220-227)

- 主人公の父がいなくなったという「問題」。遺体が見つけれなかった「問題」
- 「西を流れる川へ行く」ことが禁止される
- この全てを聞く主人公が「西を流れる川」へ行く→ストーリーが展開する

語り部分における部分評価

yaykata a-supu p ne korka kera-an wa hum-as
self 4.A-cook.PL NMLZ COP but taste-exist.SG CON sound-stand.SG
ya ka eramiskari no a-e
Q even know.NEG CON 4.A-eat

「自分で(...)作ったのは自分ながらにおいしくて聞いたことがない (くらいの) 物を食べました。」

(国立アイヌ民族博物館：C0159KM.671-672)

- 物語中における詳細 (主人公が作った料理) に関する評価。ストーリーを展開させない。「とてもおいしい」とは「非問題」か「中立的」か。
- 非問題はストーリー展開に関して重要な情報を提供する場合もある (Yamada 2003) が、この発話は発せられるコンテクストにしか追加情報を与えない
 - 詳細の描写、ストーリー展開に関係がない→中立的な使用
 - ある程度「最上級表現」でもある。レトリック・大げさ (*hyperbole*)

語り部分における非明示的な否認の例

nep ka a-e-re ka somo ki a-kore ka somo ki akusu oraun
what even 4.A-eat-CAUS even NEG do 4.A-give even NEG do therefore then
arorkisne soyne hine, hosipi hine oar isam.
stealthily go.out CON return CON completely exist.NEG

「私は何も食べさせもせず、与えもしませんでした。するとその女はそうっと出て行って、帰ってしまいました。」 (田村 1985: 10)

- 「主人公の家に嫌われた息子の死にそうに痩せた嫁が入った」というコンテクスト。
- 前述のコンテクストに「食べさせる」という肯定内容が存在しない
→ 「人に食べ物を出し惜しまない (久保寺 2004: 200)」というスキーマ (*schema*)
である背景情報から「食べさせる」という前提が生じる
(スキーマ = ある事物に関して通常連想される背景知識 (Yamada 2003: 144))
→ 「食べさせない」のでこの前提が破られる
- しかし、この女 (息子の嫁) が主人公に対してひどい行為をしたため、食べ物を与えないのが逆に当然のこと、期待されることかもしれない
- 食べ物を与えられない、嫁が帰る → ストーリーが展開する

語り部分における否定の断定の例

“*ikasuy ipe ipe*” *sekor hawean... haweoka korka*
help eat eat QUOT speak.SG speak.PL but
oro ta ipe-an ka etoranne kus nep ka a-e ka somo ki
place LOC eat-4.S even detest reason what even 4.A-eat even NEG do

「いっしょに食べる、食べると、言うけれどそこで私が食事するのも気がすすまない。」

(国立アイヌ民族博物館：N004P.605-607)

- 「*etoranne kus*」が「*a-e ka somo ki*」の“理由”になっているため、「*a-e ka somo ki*」は否認より断定として捉えられる
- 否認は「偽」を拒絶、「断定」は「真」を伝える (Mumford 2022: 594)

yuptek menoko a-ne kusu, kina haru hene, nep hene,
be.diligent woman 4.A-COP reason grass food for.example what for.example
a-e rusuy ka somo ki no sukup-an
4.A-eat DES even NEG do CON grow.up-4.S

「「私は働き者の女ですから、野草でも何でも、たくさんとってきて十分に食べ、それ以上何も食べたいとも思わないで、不自由なく生活して、子供を育てていたのでした。」 (田村 1985: 2)

- 「*yuptek menoko a-ne kusu*」であるため、逆に否定「*a-e rusuy ka somo ki*」が想定される？ → 「真」を伝える断定

冒頭部分における「問題」

Kamuy sapa yuk sapa ka ene karpa hi ka erampewtekpa p ne kusu
bear head deer head also like.this make.PL NMLZ even understand.NEG.PL NMLZ COP therefore
oyakoyak ta kamuy ka yuk ka ronnu yakka sapaha osurpa etarka
here.and.there LOC bear also deer also kill.PL although head discard.PL randomly
ki kor patek okay pe ne.
do PROG only exist.PL NMLZ COP

「熊の頭や鹿の頭をどう扱っていいのかわからないものですから、あちこちに、熊や鹿を殺しても、その頭をめちゃくちゃに捨ててばかりいたのでした。」（田村 1988:4）

- 「食べ物を粗末にしない、食べ残して捨てることがよくない（久保寺 2004: 200）」というスキーマから生じる「食べ物の扱い方がわかる」という前提が破られる
- 同時に「カムイである動物を尊敬する」という文化的背景情報における前提も破られる
- 海の神が主人公たちに正しいやり方を教えるというストーリー展開
→主人公たち自身がこれを問題として捉えず、神が干渉する

最終部分におけるモラル的コメント

ney wa ka yaymotoye yaykotanye somo ki p
where from even tell.one's.origin tell.one's.village NEG do NMLZ
iteki ietun itak yakka ese-an pe ne na
PROH ask.to.marry speak although agree-4.S NMLZ COP SFP
sekor sine pon katkemat isoytak.
QUOT one be.small lady tell.a.story

「どこかから自分の素性、自分の村のことを言わない者が来て、嫁にくれという話をしても、うんと言ってははいけませんよと、一人の若い妻が話しました。」
(国立アイヌ民族博物館：N004P.678-680)

- 語り手（=主人公）が伝える否定的な命令
- 「知らない人にすぐ納得しない」という教訓
- 物語の主な内容のまとめともなっている

結論

- 多くの場合は否定が新情報を提供し、物語の重要な部分を表す
- 聞き手・読み手の興味・注意を引く効果もある
- 登場人物の対話が物語の重要な一部
 - ストーリーを展開させる否定発話が多い
- 語り部分の方は詳細を描写するのに否定が用いられる余地がある（約半分が部分評価、中立的な使用）

例えば登場人物の紹介や性質の描写における肯定的な意味

a-yupih *nitan wa hum-as ya ka eramiskari*

4.A-big.brother be.fast and voice-stand Q even know.NEG

「兄の足の速いことか、私が見たこともないくらいだった。」

→ 非常に速い

(国立アイヌ民族博物館：N010P.16)

- 物語が進むと、この「兄」は神であることが分かる (*foreshadowing*, 伏線)
- 冒頭部分：全体評価（問題）、部分評価（登場人物の性質の描写→非問題と中立的）
- 最終部分：全体評価（モラル評価; 物語の趣旨のまとめ）

評価と残った問題点

- アイヌ語の（否定の）語用論的研究を促進
- 否定の談話上における機能の多様性について調査、物語における役割
- アイヌ語沙流方言の*uwepeker*のみ
 - 他のジャンル（*kamuy yukar, yukar*など）は？
方言差があるのか？
- 語り手（インフォーマント）の差も？
 - 5名の沙流方言の話者
 - 1950年代～1990年代に間に記録された資料
 - もっと古い時代の記録
- 今後、より多くの物語を分析対象とすべき

参考文献

- GIVÓN, TALMY (1993) *English Grammar: A Function-Based Introduction*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- GIVÓN, TALMY (2018) *On Understanding Grammar, Revised Edition*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- HORN, LAURENCE (1989) *A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 国立アイヌ民族博物館『アイヌ語アーカイブ』 <https://ainugo.nam.go.jp/> でアクセス
- 久保寺 逸彦 (2004) 『アイヌ民族の文学と生活—久保寺逸彦著作集 2』 東京：草風館.
- LABOV, WILLIAM (1972) The transformation of experience in narrative syntax. In: William Labov (Ed.) *Language in the inner city: Studies in the Black English Vernacular*, 354–396. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- MUMFORD, STEPHEN (2022) Negation and Denial. In: Piotr Stalmaszczyk (Ed.) *The Cambridge Handbook of the Philosophy of Language*, 590–605. Cambridge: Cambridge University Press.
- ヌルミ ユッシ (2023) 「アイヌ語における否定の否認機能—口承文芸での使用—」 日本北方言語学会第6回大会口頭発表, 新潟大学&オンライン, 2023年11月18日.
- ヌルミ ユッシ (2024) 「アイヌの物語における否定発話—ストーリー展開に関する役割として—」 『北方言語研究』 14: 197–218.
- NURMI, JUSSI (2024) 「Contrastive Negation in Ainu (アイヌ語における対比的否定)」 『言語科学研究』 1: 57–80.
- 太田 朗 (1980) 『否定の意味』 東京: 大修館書店.
- 田村 すず子 1985 『アイヌ語音声資料 2』 東京：早稲田大学語学教育研究所.
- 田村 すず子 1988 『アイヌ語音声資料5』 東京：早稲田大学語学きょいく研究所.
- YAMADA, MASAMICHI (2003) *The Pragmatics of Negation – Its Functions in Narrative*. 東京: ひつじ書房.
- 山田 政通 (2010) 「否定表現の諸相: 小説をデータとして」 『拓殖大学語学研究』 122: 51–78.
- 山田 政通 (2023) 「否定表現の談話分析—英語の歌詞をデータとして—」 『拓殖大学言語研究』 148: 189–222.